

## 日本二十六聖人殉教者祭

カトリック本所教会 2008年2月3日

### ミサ中の説教 『死に至るまでの強い証し-力(勇気)』

トマス・エセイサバレナ師(イエズス会)

マタイによる福音 (マタイ 28・16-20)

『[そのとき、] 十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。』』



説教をなさるトマス・エセイサバレナ師



ミサ司式をなさるエセイサバレナ師(中央)  
右は酒井俊雄師、左は染野治雄助祭

### 集会祈願

信じる者の力である神よ、あなたは日本 26 聖人を、十字架の死を通して永遠のいのちにお召しになりました。この殉教者の取次ぎを願うわたしたちが、死に至るまで力強くあかすことができますように。聖霊の交わりの中で、あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

### 説 教

ご存じのように、毎年のごとですけれども、わたしたちは 26 聖人に捧げられたこの教会で、盛大に記念することになっておりますが、何と言ってもその中心はミサです。ミサこそ、わたしたちの信者としての生活の中心で、それをもって昔からですけれども、聖人方を記念する手段になっています。

それも、本所教会の昔からの習慣ですけれども、ラテン語を使って行うことになりました。先ほどのグロリアもそうでした。これからもある部分はラテン語です。昔のように懐かしい、若いときを思うこともありますけれども、それよりも聖人と繋がりを表すような方法ではないかと思えます。

殉教は16世紀の終わりごろですけれども、司祭はラテン語で唱え、信者はラテン語で答えていました。そのときの子どもたちも、侍者をしているときのトマス小崎とか、ルドビコ茨木も、ミサはラテン語で司祭に答えていましたから、ラテン語で唱えたら、そのときの聖人たちに、またそのときの信者たちの気持ちに、わたしたちの気持ちを合わせる事ができると、わたしは思います。

ときどき考えることですが、京都から長崎までの旅先でミサは立てられたのでしょうか。聖体拝領する機会があったのでしょうか。おそらくできなかったことでしょう。二三日前のことですが、直接26聖人と関係ない書類を読んでいましたら、この出来事よりも少し前、1596年12月25日のクリスマス真夜中に、聖マルチノ・デ・ラ・アセンシオン神父(御昇天の聖マルチノ)がミサを、大阪でたてたというのです。これは、確かなことです。たまたまそのとき、日本人と関係のない、わたしの地方(スペイン[当時はイスパニア]バスク)のある人(サンフィリップ号で遭難にあった一人)ですが、その聖マルチノに会って、ミサにあずかると、自分で書いたコピーを読むことができました。最後のミサだったかも知れません。

そのとき、近いうちに殉教になるとは思わなかったかも知れませんが、危険な状態になっていたことをおそらく感じていたことでしょう。そのミサは、どのような心を持って、愛を持って、勇気を持ってたてたのでしょうか、と考えました。わたしたちは、毎日曜日ミサに行くのは面白くないとか、今日のような天候もあって、ミサに行くのは難しいとか、考えがちです。このようなことを考えたら、ミサは、その聖人がたてるのではなく、さかのぼって2000年前のイエスさまと、直接繋がるような中心的手段です。

これを考えているうちに、何年前かのちょっとした出来事を思い出しました。日本の田舎の出来事です。朝早く電車に乗っていましたが、たまたまある学校の女の子20人ぐらいでした。最初は何も言いませんでしたが、途中から「これから学校ですか」「はい」。「どのような授業ですか」と聞いたら「授業ありません。今日ミサがあるんです」と言います。知らん顔して、「ミサ?」。一人4年生の子どもが話しました「あのネ」と言って話しました。「あのネ、ずっと前、イエスさまは弟子たちと一しょに最後の晩さんを行いました。それで、同じことをしてくださいと言って。ミサはそのことをしていることになります」と。驚きました。「どこで覚えましたか」と、聞くと、「学校の先生、シスターに教わりました」と。おそらく周りの人も驚いたでしょうね。その人は簡単に、本当の中心的事を言ったのです。

わたしたちは大人であっても、ミサの定義といいたまうでしょうか、ミサの深い部分を言い表すことはできません。ミサにはいろいろな祈りがあります。30年前、40年前から変わってきましたが、言うまでもなく中心的事は変わっていません。中心的事、聖変化のことですが。

もう一つは、最初の祈りです。「集会祈願」です。ラテン語でコレクタ(Collecta)と言いますが、式次第の6番目になっています。昔から信者たちがみな集まったとき、一番最初にこのような祈りを唱えたそうです。このためにこそ、この祈りには非常に深い意味がいつも含まれています。と言うのは、その日の典礼、その日の記念する聖人、秘儀などの中心的なことを言って、それにちなんで特別な祈りをするのです。

では今日は、日本26聖人のミサの「集会祈願」は、何を願うのでしょうか。この「集会祈願」の形はほとんど決まっています。

○ 最初の一つは呼びかけです。神様に向かって「信じる者の力である神よ」。この呼びかけの中心的なヒントが出てきました。「力」、中心的なものが出てきました。「信じる者の“力”である神よ」です。

○ その次、記念することが出てきます。記念する秘儀、記念する聖人などを思い出します。

「あなたは日本26聖人を、十字架の死を通して永遠のいのちにお召しになりました」と。

○ 三番目は、中心的な願いです。では、これを言って何を願いしましょうか。それは今日のポイントとしたいと思います。

わたしたちは、信者として、もちろん信仰を持っています。ときどき言うのですが、わたしの信仰は薄いとか、弱いとか。信仰といっしょに愛が必要ですか。愛は持っているかどうかとかです。しかし、本当の意味で信者が足りないのは力です。勇気です。信者はもちろん言います。「愛してます」と。しかし、そのような掟を守るのは、そのような務めを果たすのは、そのようなことをやめていくのは、信じて、愛しても、力がありません。

みなさんも多分考えたことがあるかも知れませんが、もし、もしですね、今の状態ですと、そんなことはないでしょうけど、だれかが来て、「信仰捨てないと殺されるよ」と。そう言われたのでしょうか。考えたことがあるのでしょうか。しかし、そのときの日本26聖人の小さな子どもでも、12、13、14歳の子どものも、あるいはおじいさん、60台の大人でも、勇気を出して、最後まで行きます。と殉教しました。つまり、信仰はわたしたちと同じ、愛はわたしたちと同じですが、あったのは力です。勇気です。自分は若いですから力を出します。ということではなくて、それは神様の特別な恵みです。

多分1年、2年前に、その26人のひとりに、このようなケースがあつたら、どうするの、ああ大変だね。そのとき力があるかと考えたかも知れませんが、そのとき、みんな喜んで、死に向かってです。「喜んで」とたびたび書いてあります。子どもでも喜んで死に向かっていったとあります。どこからその力が出たのでしょうか。あの子どもに、その力はないはずですが、子どもにその勇気がないはずですが、勇気がありました。これは素晴らしい神様の恵みです。皆さん、どうですか。わたしたちはその力を頼んだことがありますか。神様に、あの26聖人のような勇気を出さしてくださいと、頼んだことがありますか。

想像的、理想的に考えて、わたしが殉教になったらどうかと考えないで、日常生活の中で殉教＝証ししてありますか。殉教者は証し人ですから、証ししてありますか。ということです。毎日の生活の中では難しいときがあります。困難なときにぶつかることがあります。その

ようなとき、わたしたちの信仰はどこに行った、わたしたちの愛はどこに行った、と、親交も愛もあるかも知れませんが、多分足りないのは、その勇気、その力です。それも神様から来る素晴らしい恵みです。そのためにこそ、今日の祈りには、それを中心としてお願いするのです。

では、3番目の部分ですけれども、「この殉教者の取次ぎを願うわたしたちが、死に至るまで力強くあかしすることができますように」です。根本的な祈りには、力を与えてください。素晴らしい祈りですよ。今日だけでなく、たびたびこの祈りをしてください。問題あるときでなく、普通の生活の中で、この祈りをしてください。

「主よ、力を与えてください」。そして、わたしだけでなく、わたしの家族、わたしの子ども、わたしの知り合い、教会のすべての人、すべての人にこのような霊的な勇気、心からの本当の力を与えてください。それによってこそ、わたしたちの信仰と愛がいつまでも残ることになります。いつまでも。本当に意味のあることになりますから、力を与えてください。

家族のお母さん、確かにこの力、必要ですね。学校の先生、この力、必要ですね。学生、この力、必要ですね。修道士、司祭、この力、必要ですね。病気になって、年寄りの人にも、この力、必要ですね。皆さん、一生涯、力を頼んだことがないかも知れませんが、これから、この力、この勇気を頼んでください。それは、今日祝っている、記念している日本26聖人にならってお願いしましょう。

最後のことになりますけれども、この力は神から出てくる力です。わたしたちの意志を緊張して、では頑張りましょう、だけでは足りません。これは超自然的な恵みです。聖人たちも同じようにしました。お願いしたのでしょうか。それこそ先ほど言ったミサのとき、それこそ頼んだのかも知れませんが、ある部分の何人かは書いてありませんでしたが、信者の方があずかったそうですけれども、あのクリスマスの真夜中のミサのとき、「主よ、力を与えてください」と。本当に与えてくださいましたネ。いろんな立場から、聖人たちを見ることができますが、今日の「集会祈願」にちなんで、このテーマに、中心的なことにしたかったのですがいかがでしょうか。

今日のミサの間に、主に、この日本の教会のために、この勇気を頼んでください。この勇気を頼んでください。昨年12月ですか、日本の司教が「アド・リミナ」のためにローマにいらしたのです。ご存じのように5年に一偏、ローマに行く義務のようなものがありまして、パパ様に自分の教区のことを報告しますけれども。パパ様がいろいろなお話をしましたが、「もう少し勇気を出してください」——この言葉ではなかったのですが、その意味の文章が出てきましたネ。多分、外から見ると、日本の教会は何か足りないと思われるのかも知れませんが、根本的なことではないでしょうか。

心を合わせて、これを、今日の中心的な祈りとしたいと思います。

『主よ、本当の意味での力を与えてください』。

完